戦鬼のヒーローアカデミア

ルオン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始まりは中国の軽慶市、発光する赤ん坊が生まれたという報道からであった。

赤ん坊の誕生以来、世界各地で超常現象が報告され、世界総人口の約８割が超常能力〝個性〟を持つ、超人社会へとなった

そして超人社会となった社会では、夢物語であったこと、ヒーローという職業が人気となり、個性を使って犯罪を犯す敵と戦っていた

そんな世界に、先祖とその友人の力を引き継ぎ、修行する少年がいた

これは、先祖たちの力を個性として引き継いだ少年が、仲間たちと共に敵に立ち向かい、最高のヒーローを目指す物語である

目次

プロローグ ―――― 1

プロローグ

個性

それは本来、個人特有の特徴を示す言葉だった。

でもそれは、特徴の意味を示すと同時に超常能力へと変わった。

始まりは中国の軽慶市、発光する赤ん坊が生まれたという報道からだった。

その赤ん坊の誕生以降、世界各地で超常現象が報告され、世界総人口の約８割が超常能力〝個性〟を持つに至り、社会は超人社会となった。

そしてそれを機に、夢であったヒーローは職業の１つとなったと同時に、個性を利用して悪事を働く敵（ヴィラン）も現れた。

そんな世界で１人の少年が、山奥でとある老人と組手をしていた。

「フッ!!ハッ!!タァッ!!」

「まだまだ!!腰をいれて拳を打たんかい!!」

「はい!!」

言われた少年は、老人へ更に拳を打ち込む。

が、老人は少年の拳を簡単に受け止め、少年を投げ飛ばす。

「あだっ!?」
「バカもん!!投げられた際の対応の仕方を教えたじゃろ!!」
「は、はい!!」
「よし!!もう1回打ち込んでこい!!」
「はい!!」
　言われた少年は、めげずに何度も打ち込み、老人へと挑んでいく。
　だが、少年は何度も投げ飛ばされる。
「どうしたどうした?その程度なのか?お主の力は?」
「くっ!!……だったら!!」
　―キーン―
　少年は音叉のような物を取り出して音を鳴らし、額へと持っていく。すると額に鬼面が現れ、少年は紫の炎に全身を包まれる。
「ふぅぅぅぅ……はぁ!!」
　やがて少年は炎を弾き飛ばし、鬼の姿へと変わった。
「ほほう……鬼で来たか。では儂も少し本気出すかの!!」
「いきます!!」
　鬼となった少年は、再び老人へ向かっていった。その際に右手に球体を作り出し、老

人へ叩きつけようとするが、叩きつける前に蹴り飛ばされてしまう。
「ぐっ!?」
「どうしたどうした!?そんなんじゃ強くなれんぞ!?」
「まだまだぁ!!」
鬼となった少年は再び、老人へと向かっていく。
それから数時間が経ち、少年は山奥にある寺へとおり、老人と向かい合って座っていた。
「響助よ、お主も13となり、お主は遠い先祖たちと、その友、そしてお主自身の力を使いこなせるようになった」
「はい」
「よってお主には、儂の力【雷凰(らいおう)】を引き継いでもらいたい」
「なっ!?」
響助と呼ばれた少年は、老人の言い出したことに驚く。
「何を言い出すんですか師匠!?」
「よく聞け響助、儂ももう歳じゃ。今の体では名のある敵を相手にしても、辛うじて勝てるか、別なヒーローが来るまでの時間稼ぐことしかできんじゃろ。そして儂もいずれ死んでしまう」

「師匠!!何を言って!!」
「落ち着け。儂とて人間、いずれは寿命でこの世を去る。コレは必然なことじゃ。じゃから今のうちに、儂の力の一部を若き世代に継いでもらいたいのじゃ」
「でしたら俺じゃなく、あの方々に継いでもらえばよろしいではないですか!?俺には既に、数多くの力が宿っています!!とても使いこなせるとは思えません!!」
「あやつらから、お前ならば使いこなせると言っておるのじゃ」
「あ、あの方々たちが?」
　響助は、師匠と呼ぶ老人の言葉に耳を疑う。
「奴等に儂の力の1つを継がせに行った際、雷凰の力も継がせようとしたが、皆口を揃えて、お前に継がせてほしいと、お前ならば使いこなせると言っておった」
「皆さんが……」
「そうじゃ。儂自身も、お主ならば使いこなせると思っておる」
「師匠……」
「力を……継いでくれるな?」
「……はい」
「では、儂の方へ来い」
「はい」

響助は言われた通り、師匠の元へと近づく。
すると師匠は、響助の胸へと手をつける。
そして
「ふぅ……はぁ!!」
「ッ!?」
師匠の手が光、その光が響助の体へと入る。
「どうじゃ?違和感はないかの?」
「はい、特にありません」
「ならばよし。言っとくが、雷凰はお前に行き渡ったことで最初の状態となっておる。雷凰を進化させるのは、お主次第じゃ。毎日の修行を怠るなよ?」
「はい!!」
「最後に……お主はどんなヒーローになりたい?」
「俺は……人々の心の支えになれるようなヒーローになりたいと思います!!」
「では行け、行って勉強をし、修行をこなし、雄英へ受かってみせい!!そして、青春を謳歌してこい!!」
「はい!!」
「そして!!女子とにゃんにゃんして、恋をしてこい!!リア充爆発しろぉおおおお!!」

「は…い……？……え？師匠？」
「行ってこぉおおおい!!」
「ぎゃあああああああ!?」
響助は、師匠に自分の荷物と一緒に、その場から投げ飛ばされた。
そしてこの時から、少年こと波風（なみかぜ）　響助（きょうすけ）の、ヒーローになる運命の歯車が動きだしたのだった。